方言文章論試作

——連文の類型——

藤原與一

はじめに

二文以上にわたる、センテンスの連結体を文章とよぼう。〈極端な場合として、一文から成る作品にも、文章の名は冠することができる。〉文章は、前後につらなる「文」相互間の呼応を契機として成立している。パラグラフには、パラグラフとしての、呼応の内面的統一がある。

口頭語の語られるのを聞いていると、相前後するセンテンス二つ以上の、特色を以てつながりあうさまが、ことばづかいの調子のうえに、いかにもはっきりと出ているのをみとめ得ることが多い。ことに、前後二文の緊密な連関のさまが、さまざまに見てとられる。文章語のうえでも、このようなことはみとめられるはずであるけれども、音声相のたどられる場合は、このことがいっそう顕著である。一般に、音声的表出においては、そのことばづかいの調子の抑揚頓挫のうちに、文相互の連関相が、明瞭なうねりを描いて出ていると見られよう。文章の構造は、このうねりにしたがって、解剖し説明していくことができる。

音声的表出も、方言上の会話になると、右の事実が一段とけざやかに出がちのように思われる。方言では、共通語意識に制約されない地方的生活のもとで、その生活の自由で個性的な言語表現がなされているからである。すくなくとも、ここでは、文連関上のいろ〳〵の特色が、とらえやすいとは言えよう。わけても、その前後二文連接の場合の特色は、すぐに、いろ〳〵と、捕捉することができる。

以下には、方言文章論の試作の一片として、この二文連接の場合をとりあげてみよう。二文の連接したものを、連文とよぶことにする。

必然的連関の二文

二文連接の特殊構造について、筆者はかつていくらかのことを述べてみた。〔「日本語方言文法の研究」〕それは、『文構造論』において、『呼応』観を展開せしめてのことであった。

その際、文字どおりの「重文」（センテンスが実際に重なる場合）に言及し、これに、呼応のきわめて明瞭な場合が少くないこ

とを言ったのである。そういう、一文脈下の『重文』を、二文の必然的連関と言った。そのような必然的連関の二文を、また、連文ともよんだのである。

二文連接で、第二の文が接続詞を以てはじまれば、この接続詞が、二文呼応の顕著なくさびになることは、その際述べた。それから、方言として特色のある二文対立呼応に、発語・終語のある場合があることを指摘したのである。後者の場合を、今、共通語的表現をかりて、あらためて説明してみれば、

○どれ。　出かけようかな。

というようなのが、いわゆる発語（〃どれ〃）の見いだされる場合の、二文の対立呼応（必然的連関の二文）である。発語は、語でなくて文である。よってこれは発文とも言うべきであるが、発話と言ってもよいと思う。

○あそこにたしかにあったよ。　うん。

これは、終語（〃うん〃）のある場合である。終語はまた終文とも終話とも言うべきであるが、いずれも熟した名ではない。ともあれ、実情では、右であると、「うん。」というのが、簡単ながら第二文となって、上文と必然的に連関している。そのさまは、発話が先頭にくる場合と相似ている。名称はともかく、後方にこのような形で、特定の呼応体がくることを、また、それが方言上で著しい傾向になっていることを、われ〳〵は、とりあげざるを得ないのである。

「アッ、しまった。」とある時は、「アッ」は感声であって文ではない。したがってこの場合は、二文の必然的連関ではない。ひとり存立する時の「アッ。」は文とされる。また、「アッ。しまった。」のこともあり得る。この場合は、二文の対立呼応と見られる。この時は、前行の「アッ。」を発話と見てよい。これの決定は、前後二体のつながり目の、『ことばづかいの調子』のうえで、休止ぐあい、主としてその休止時間による。

発話のくる場合は、その二文間の休止間の休止が、終話のくる場合よりもいくらか長い。

発話・終話のある場合は、二文ではあるけれども、二文がまさに一文のように緊密に連関している。いわゆる必然的連関の、まさに必然的な場合である。このようなのを特殊的なものとして、順次、諸多の、必然的連関の二文が見いだされる。これらを、連文の類型として検討することができる。

連文の類型

——安芸八幡村の場合——

方言上では、右に述べたような極端に顕著な連文の場合をはじめとして、いろ〳〵の場合が、興味深くながめられる。方言表現の生活の特質を見るのに、この連文の類型を整序してみることが有効である。

以下では、昭和二十九年九月現在の、広島県安芸のくにの奥、山県郡八幡（やはた）村のことば——『八幡方言』と称し得る——について、その言語生活の連文相を見る。調査の準備と、作業の実際とについては、今はふれない。ここに取り出す資料は、当言語体系（生活語体系）に対する一定計画の一週間調査の成果中、連文例としてカード化し得たものである。連文の諸相をくまなく見よう

として観察した結果ではないことをおことわりしなければならない。ただ、そうした偶然資料からも、類型のいくつかを指摘し得ることを報告したいのである。

他の方言について調査し記録し得ている連文事例を引用すれば、あり得べき連文類型をだん〳〵明らかにし得るとしても、今は特殊の『個』に即することとし、もっぱらこの八幡方言の場合にかぎって、いちおうの記述をする。方法論的意義は、これで十分であると思う。

1 発話のある場合

——発話によって導かれる連文——

○エーエー。アガーデ　アリマス　ヨ。
　えゝ〳〵。そんなですよ。

〔いやしくない、かなり上品な言いかた〕

前説のとおり、このような、発話のある場合が、一つの類型としてとりあげられる。この種の連文の表現的性格は、発話を視点としてとらえることが容易である。当方言として、「エー」という返辞はわるくないことばであり、それに対応して、「アリマス」がきている。「アリマス」は、共通語の「ございます」に近く、方言的なていねいさを表すものである。ちなみに、「アガーデ」は、いわゆる遠称の指しかたをしているが、これも、方言的特色をなす一つの表現法であって、実際は右の訳文に記したように受けとるべきものである。なおついでに言えば、右の第二文の文アクセントは、安芸全般の大体の傾向からすれば、「アガーデアリマス　ヨ。」とあってよいところであるが、安芸西北奥一隅のこの地のアクセントは、右のように、「ガ」だけを高くしている。これは、山口県下に著しい、文アクセントの特質的傾向、「……　○○……。」「……　○○……。」に似た形で、それこれの関連的な存在が注目される。

2 終話のある場合

——終話によって特徴的にしめくくられる連文——

○アノ　ジュブンワ　アッタ。ノー。
　あの時分はきっとあったよ。ねえ。

〔中等度の品位の言いかた〕

この連文は、「ノー。」の終話によって注意される。ふつうの会話に、「アノ　ジュ　ブンワ　アッ　タ　ノー。」のことがあり得る。それはそれとして、今とりあげたのは、「……アッタ。」の「タ」の下の休止がとりわけ大きい場合である。ことばづかいの全体的な調子では、この際、「……アッタ。」の「タ」の所での文アクセント下降が、「……アッ　タ　ノー。」の場合の「タ」の所での音の低下よりもいっそうひどく、両者の差違、したがって両方の場面的相違ははっきりとしている。右、第二文の「ノー。」はよびかける気もちの強い、独立した、うかがいの表現である。おのずから、「……アッタ　ノー。」の場合の「ノー」よりは、一だんと内容の豊富なものになっている。

○カーカー。クソ。
　やれ〳〵。こいつ！

〔中年以上の男性的なことば〕

これは、何かのことで、いや気をおぼえて、なげやりに言ったことばである。一種の慣用的な表現法になっているか。ただし今

は年長の男子のことばに偏していよう。極端な形態の連文としてこれをあげた。「カー」というのは、元来、文字どおりの間投助詞である。「コー　サムーチャ　カー　ヤレン　ノー。」(こんなに寒くては、ほんとに、どうにもならないねえ。)のようなのが、そのもっとも熟した用法である。かねて、発話的にも終話的にもつかわれる。これが出れば、その表現は、いったいに、くだけた気分、時におどけた気分の、いくらか低卑ぎみの表現になる。したがって、男性間での使用の方が多いものである。右では、発話的に用いられる場合の「カー」が重畳されて、特異な文表現となっている。一方、「クソ。」は、「何々こそ」の「こそ」の転じたものの自由な用法で、もとよりつよい言いかたになっている。素朴な方言表現の世界を有力に打ち出す特徴的な「カーカー。」は、まさに「クソ。」とよく呼応し、内実の緊密な連関を示している。

これは、終話の視点から取り上げることができるとともに、「カーカー。」を発話として見る見かたからも取り上げることができるのではないかと、思われなくはないであろう。いちおうは、そうも考えられる。しかし、このことばづかいの調子を見るのに、抑揚の実質一つを見ても、右に明らかなように、この二文では、第二文の方が従属的地位に立っている。今は、附加的な特異の文「クソ。」の、独自の連文終結の役わりに、『終話』性をみとめることにする。

こうして、終話をみとめ得る場合が、一つの著しい連文類型として注目される。

3　よびかけ文をもってはじまる連文

○センセー。ジカンワリュー　クダサイ。

先生。時間割を下さい。

〔小学校の教室　よいことば〕

よびかけ文をもってはじまる場合は、さきのいわゆる発話のある場合に比肩せられる。あるいは、よびかけ文も、広い意味の発話の、一種の場合ともされよう。それくらいであるから、この3の場合も、顕著な一連文類型として、容易に取り出すことができる。

○コンタシュー　ヤー。キョーワ　アメガ　フリャー　スマー　カ　ノー。

おい君。今日は雨が降りはしないだろうかね。

〔男性の同輩間のうちとけたことば〕

これは、よびかけ文が、「ヤー」でしめくくられていて、よびかけ性はことにあらわである。第一文の「ヤー」と、第二文の「ノー」とが前後に呼応して、二文の必然的連関を、まさに頂点的に表示している。文末助詞のこのような効果については、あらためて後に述べよう。(12)

○コンバンワ。アリガトー　ゴザイマス。

今晩は。まあごめんください。

〔おとなのことば〕

これは慣用の訪問挨拶である。(「コンバンワ。」とともに、入口の戸をあける。)この場合の「アリガトー」は、物品の贈与に関係なくつかわれている。つまり、まいどつきあってもらっていることが「ありがたい」のである。食事のもてなしは受けなくても、ただ「ありがとう。」の意に、「ゴッツォ(御馳走)サンデゴザイマシタ。」と言う習慣が方々にあるが、それとこれと思いくらべら

れないことはない。

○オウチニ。ゴメンナサイマセ。
もし〳〵おうちのかた！　ごめんなさいませ。
〔年長者のあらたまったことば〕

これもきまった挨拶ことばであるが、よびかけ文の「ニ」文末助詞が注目される。その尊敬気分の表示を承けて、次文「ゴメンナサイマセ。」の鄭重な表現がよく連関している。

4　反復形式の連文

〔『日本語方言文法の研究』五三三頁参照〕

ここでは、「反復」ということばを、広い、ゆるやかな意味につかい、そのいろ〳〵の場合を見ることにする。

○タイガター　コト　ヨ。タイガター。
ほんとにお恥ずかしいことです。ほんとにおはずかしい。
〔老男→筆者　心からの挨拶　上品〕

これはまったく単純な反復になっている。それだけに、表現上の強調性は明らかである。

○ハー　イラン　ヨー。ハジメ　コータ　トキニャー　イルガノー。ノー。ボッチャン。
もうはや、いらないよ。はじめ買った時にはいるけどねえ。ねえ。坊ちゃん。
〔幼児男同士の無邪気な会話〕

この場合の第二文と第三文とに、「ノー」反復が見られる。ところで、第三文「ノー」は、第四文「ボッチャン。」に対して、発話のよびかけの役をはたしているので、第三・第四両文は、特に緊密なつながりにある。そこで、文末「ノー」を持った第二文は、文脈上では、すなわちまたことばづかいのうえの勢では、第三・四文連結体とよく呼応しあっていると見られる。第三文は、そのような地位にあって、第二文末によく承応する反復形である。第二文末の「ノー」という抑揚声調とその休止断絶とに対して、第三文「ノー。」の抑揚はよく応じている。このうつりゆきをさかいとして、以下の発言速度ははやくなる。はやさがすなわち強調となる。

○ドコイ　ウラハッタ　カ。ドコイ　ウッタ　カ。
あの土地を、さて、どこへお売りになったかな。どこへ売ったかな。
〔老男のひとりごとめいた話しぶり　よい言いかた〕

ここに一つの注目すべき反復形式を見る。第一文の「売ラハッタカ」は一種の敬態である。例の「なさる」ことばが、おもしろいことに、「ンサル」を一般とする安芸地方の、この一隅で、近畿流に、「ハル」ことばとなって孤存している。これは、今やようやく衰退しようとしており、中年以上の人たちにおもに聞かれる。そうして、実質は、衰退中のものにありがちのとおり、敬意のごくうすれた、低い敬語となっているのである。多くの人が、これを、わるいことばだなどとも言っていた。が、純粋の卑俗なことばでないことは、実際の使用に明らかだったのである。流動する敬語については、たいてい、このような事実がみとめられる。右の例の場合も、第一文と第二文とには、表現されたものに差等がある。第一文は、たしかに、ある程度の敬意のもとに発言されたのである。それでいて、すぐに「ドコイ　ウッタ　カ。」の反復がおこされたということは、その敬態が、常態とさほど不調和

なものではないことをものがたる。いわば、そんなに高く敬して言わなくてもよいと思われるところで、多少のわきまえをもって、第一文はおこされたのであろう。（自覚された場合に準じて考えてみて、こう言える。）だから、次いでの発言は、「ドコイウッタ　カ。」と、常態の、さりげない反復となった。さて、このような意味のもとに、敬と常との二文態が連関するから、内実上、呼応のさまは特定的に顕著なのである。

○イケタ。イケタンダロー。

あの人は行かれた。行かれたんだろう。きっと。

〔返事　おとなのよいことば〕

これは、右に出した例が敬卑上の差等を見せた反復であったのに対して、完了の報告とそのことの推量という、叙法上の差等を見せた反復である。

○ワシャー　バカサレタ　デ　ヨー。バカサレタンダロー。

わたしは、ばかされたんだな。ばかされたんだろう。きっと。

〔思った内容の告白　若い人のやや卑俗な感情による発言〕

これも右に準じて受けとることができる。もっとも、これにあっては、第一文内の「バカサレタ」は完了の言いかたであるけれども、それに「デ」というみずからいぶかる一種の推量表現法の要素がついているから、第一文全体は、推量表現の意味になっており、かくてこれが、第二文の叙法とよく相応ずることになる。第二文は、推量の感情をより確定的に表現することによって、反復の新味を出したものと見られる。

○イッソ　キカンカッタ　ノー。シランカッタ。

ついぞ聞かなかったわねえ。ちっとも知らなかった。

〔青年女子間の会話〕

これでは、はじめに話しかけ、つぎに自得の言いかたをしている。「キカンカッタ」→「シランカッタ」のように、ある内容を、ことばを変えて反復表現することはめずらしくない。

○オバサン。イマナー　ドー　カイ　ノー。イマナ　サンニョ　ガ　チガヤサッツロー　カ　ノ。コレ　ミチャンサイ。

おばさん。今のはどうだろうな。今のは計算がちがいはしなかったろうかな。これ見てごらん。

〔店員男→初老の女　気安い中にもすこしの遠慮〕

これにおいて、第二文第三文の必然的連関を特に取り出すことができる。その緊密なまとまりのさまは、第三文の文末の「ノ」というしめくくりの抑揚・声調によく出ている。さてこの連文では、起句「イマナ」がくりかえされて、反復の調子は早くも著しく、かつ叙述では、前行文の抽象的内容が後続文で具体的に布衍され、したがってことばは大いにちがってきているのである。

○マタ　アント　イーダータ。ケンカ　スルト　イケンノンダ　またあんなこと言い出したなあ。けんかするといけないんだよ。

〔幼男らのあそび〕

この場合、前後二文は思考上では反復の傾向にあって、表現されたものは発展を示している。二文の連関と緊縮のさまは、第二文の文末「ノンダ」のところによく出ている。ちなみに「ダ」は、安芸一般にはなくて、石見に接するこの安芸北西奥などに見

られるものである。

以上、反復形式と言える連文類型については、その内部に、いろ〳〵の小類型を見ることができる。反復形は、注目すべき類型であろう。口話においては、その自然のなりゆきとして、諸種の反復形が生まれるはずと思う。母がその幼い子に一言かたっても、〃コレ？　コレはお塩なのよ。〃などと言う。

5　対比の連文

○テゴロヂャ　アリマセン。テゴオー　ナリマシタ　ノー。
　手ごろではありません。手ごわくなりましたねえ。
〔老男が農作段別の多すぎることについて言う〕

これでは、まず「テゴロ」と「テゴ……」との『反復』が目につく。が、じつは、ただの反復ではなくて、対比なのである。「テゴロ」にきっかけを得て、第二文「テゴオー」は発足している。

6　並挙の連文

○コンニモ　アラー。アンニモ　アラー。
　ここにもあるよ。あそこにもあるよ。
〔上品ではない言いかた〕

これも「ここ」と「あそこ」との対比と見られないことはない。が、第一文第二文の表現を全体的に対比させて見れば、並挙の形とでも言うことができる。

7　累加の連文

○アリャー　ノー。クーテカラ　ノー。
　あれはね。食ってからね。
〔ぞんざいなことば〕

このように、累加していく言いかたに形式上の特色のみとめられるものもある。

8　いわゆる倒叙の連文（旧著五三六頁参照）

たとえば「だれだい、君は。」、こう表記されて、これが、倒叙とか転置とかよばれている。一つの考えかたによれば、なるほど転置でもあろう。しかし、表現の伸びをそのまま伸びとして受けとり、表現のむかう方向をすなおに受けとれば、これは転置でも倒叙でもなくて順叙である。全体の流れを直接にとらえると、右の例であれば、「だれだい。君は。」の、必然的連関の二文と受けとられる。以下には、倒叙などと言われる、そういう形の叙べかたの連文を、特徴的な類型として取りあげる。

単純な倒叙形は、いつでも出来るものであろう。次下の例は、すこし変ったものである。

○ノッテ　アルキョーリマス。クチュー　ウエー　ナーテ。
　のって歩いていますね。口を上にして。
〔中男　鯉の遊泳について〕

この「のって歩きよります。」「口を上になして。」は、転置してみても、主・述の関係となるものではない。後者は前者の修飾句になるものである。このような関係のものの、右の前後関係では、連関のゆるやかな調子が感ぜられる。実際、そういう発言であった。

○マー　トーテ　ツカーサレー。ガクモンノ　ヒラー　ツマランガー。
　そのことなら、まあ聞うて下さいよ。学問の方はだめだけど。

〔中男　素朴なあらたまりかた〕

これの第二文末は「ガー」となっている。前者例の第二文末は「テ」である。順説の「て」のむすびよりも、逆説の「が」のむすびの方が、第二文の第一文に対する連関性をいっそうよく示していると見られようか。この時まさに第一文も「……ッカーサレー。」の命令形で、前者例の「……マス。」のむすびとは異る。本例の場合は、前後の二文の間に、前者例とはちがった、結合の硬い調子が感得される。

○コージュー　ヤリャーガルケー　ノー。ドガー　ユーテモ。
　工事をやりやがるからね。どんなに言っても。
〔初老男↓同　卑罵〕

○ゴトーサンモ　オナードシデスケー　ノー。ウチノ　オヤジト。
　後藤さんも同じ年ですからね。うちのおやじと。
〔中男↓筆者〕

これら二例も、いわゆる倒叙の下文が、明らかな、しかも短い修飾句になっている。そうして、〃補足の倒叙〃とでも言い得るさまが、ことに明らかである。第一文がこの際「ノー」という文末助詞で終っているのは注意される。

○ゴイセン　ノー。ハヨ　ゴイシャ　エーノニ。
　【人が】見えないね。早く来られればいいのに。
〔田舎風の親しみ深い敬意表現〕

これも右に類するものとされよう。そうして、倒叙ではなくて順叙と言える如く、第一文の「ノー」はよく下に大休止・断絶をおこしており、それと相対してまた、第二文の「ノニ」が、文末助詞的に安定している。

9　二文仕立の連文

一文であってもよいような構成のものを二文に仕立てている、その意味において、前後の必然的連関の明らかな連文がある。言うまでもなく、「一文であってもよいような」とは、観察者として傍観的に言うまでのことであって、この場合、前後に分かれて二文になって、その間に断絶の効果がおこっていることが、表現として特定の意味を持つのである。

○ホンニ　チョロインダケー。ツカマエドモ　サセン。
　ほんとにあの鯉はすばしこいんだからね。つかまえなんかさせはしませんよ。てんで。
〔気さくな言いかた〕

この場合、「……ケー。」で休止は大きい。「ケー」は文末助詞的役わりに近いものを示すにいたっている。ついで第二文は第一文よりもいくらか早口に、終ほど力を入れて発言される。「サセン」と高い調子に終り、これは第一文の早くからの下がり調子とは対応する。連文全体の緊密さは、この対応の上に明らかである。

10　接続詞による連文

前二項のなどのように、第二文冒頭に接続詞のはいり得ないものがある。それに対して、接続詞のはいるものがある。

○ソコイ　オッツカーサイ。ソーセニャー　ヤレマセン　ワイ。
　そこに居って下さい。でなくては、いけませんよ。
〔主人↓客　上座をすすめる〕

これでは、第二文の冒頭に、接続詞「ソーセニャー」がきてい

る。これは、二文の対応のしかたを、一種の接続法で、形に明らかに打ち出したものである。

11 無形接続詞による連文

○アメガ　フリダータ。ハヨ　ヒャコッチャンナイ　ヤ。

あ、雨が降り出した。【あそこの、たんぼの誰さんに、ほしものを入れるように、】早く大声でどなって下さいよ。

〔粗野な親しさ〕

これなどは、第二文冒頭に、接続詞を装着し得ないことはない。もっとも、現に装着していないとおり、表現全体は、ここですこしもゆるまず、緊張の断止を見せている。第一文末に文末助詞の有形化していないのは効果的である。一方から言えば、その有形化していないところに——そこのことばづかいの調子に——次下に接続詞の継起してよいことを感ぜしめるものがある。第二文末の「ヤ」は、この連文を、まさに一連一文脈のものとして統轄し得ている。

○ナント　ダンベーデ　ナー。カシコマレン。

なんと私はこんなにふとった図体なんでね。どうも、きちんとすわれない。

〔ややおどけたことば〕

これも、つづきから言えば、第二文のはじめに接続詞をおけないことはない。第一文は相手に言いかけることばになっている。第二文は自分に言うことばになっている。前者例の逆である。

○タクチョンガ　トートー　キタ。ワシガ　ツレテ　キタンダ　卓ちゃんがとう〳〵遊びにきた。ぼくがつれてきたんだ。

〔子どもの世界〕

これは子どもがおとなに報告することばになっている。第二文末は「キタンダ」となっており、これが連文全体をしめくくっている。その「ンダ」の叙法からして、第一文下の休止の内面に、無形接続詞が反求されるのである。「ンダ」は文末助詞に似た地位にあるものとも考えることができる。

12 文末助詞対応の連文

つぎのものになると、また接続詞は入れようがない。第一文の文末助詞と第二文の文末助詞とが、きれいに対応している。

○コンタ　コッチー　ゴザレ　ヤー。ソカー　アッイ　ワイ。あんたこっちへおいでよ。そこはあついよ。

〔年長者間のうちとけたことば〕

これにおいては、第一文は「ヤー」にしめくくられ、第二文は「ワイ」にしめくくられて、この二文が、「ヤー」対「ワイ」的に対応している。完全に「ヤー」「ワイ」の文末助詞が出ているから、この場合、抑揚上の対比に注目すべきものはない。「ヤー」と「ワイ」とは、当方言生活において、存立の位相を同じくし、いわば同僚ことばである。ここに、前後二文の、まさに必然的な連関相が見られのである。

○オマイラー　オーケナ　コトー　ヌカーテモ　ノー。ツマランヨー。

おまえなんかは大きなことを言ってもね。つまらないよ。

〔男青年間のけんか〕

これでは、前後は「ノー」と「ヨー」との対応が見られる。これもまた、当方としては、しっかりとむすびあうものなのである。

○ウラー　ノー。トテモトテモ　ヤレン　ヨ。
　わしはね。とても〳〵どうにもならないよ。
〔おとなの男子のくだけた言いかた〕

これも同例である。

「ヤー」対「ワイ」の場合にしても、「ノー」対「ヨー」の場合にしても、この種のものを対応させる連文の表現は、みなよく方言の方言性・土地らしさを示し、生活感情の特質をよく反映する。「ヤー」対「ワイ」は、いくらかの品位とやさしさ、ゆっくりとした気分を出すことがつよく、「ノー」対「ヨー」の対立は、それよりもやや品位の低い感情を示し、打ちつけがましいところがある。土地ことばとして、素朴な表現態度を反映する点では、後者の方がいっそう特徴的と言えよう。

○ソリョー　ミー　コソ。ヤッツロー　ガー。
　それを見ろ。しくじっただろう。
〔おとなの叱責〕

これにおいては、「コソ」と「ガ」とが対応している。これまた、「コソ」あっての「ガー」であり、「ガー」に承けられればこその「コソ」である。こうして、連文全体の表現気分は、「ソリョー　ミー　コソ。ヤッツロー　ガ　ヤー。」との言いかたをもする、――その「ヤー」のむすびかたもする、「ヤー」的なものとなっているのである。これは、低卑ぎみの、それでいて力づよいところのある、男性的な感情のものである。

文末助詞を明瞭な頂点とする文双方の対応は、方言表現上で、一つの顕著な連文類型をなすもののように思われる。この傾向の中に、文末助詞化した種々のものが見いだされる。そのような文末助詞化ごとに、前後両文の対応の特殊性が、個々に色こく打ち出される。

おわりに

右は、一方言の実情にもとづく一とおりの記述にほかならない。

国語今日の方言状態を、つらねて一大共時態としてながめ、そこに起り得ている連文の諸相を十分に取り上げれば、種々の角度から、一定の連文法則を帰納することができよう。方言生活の特質は、この把握によって、ずいぶんに明らかにされるところがあると思う。方言文章論の一項目、連文論は、われ〳〵にとって旧味深い題目である。

連文の構造の究明は連文の表現性の究明につながる。連文の構造論は表現論と一如である。一般化して言えば、文章構造論はすなわち文章表現論となる。このような文章表現論が、『文章』の生活の実質をよく記述し得るであろう。生活語としての方言の、その生活語法の解明のためには、この種の文章表現論が、重要な方法となる。

（昭和二十九年十一月二十九日）

――広島大学教授・文学博士――